■ 海外研究事情

世界の労働関係研究所・資料館・図書館（13）

── イギリスのTUC，労働史研究資料センター，人民の歴史博物館

五十嵐　仁

はじめに

イヤー，ドキッとさせられた。駅のチケットカウンターで指定席券を買ったときだ。間違ってスタンプを押したブリット・レイルパスを初めて使ったが，ドキッとしたのはその時ではない。

この間違いについては裏に理由が書いてあるので，駅員は笑ってスタンプを押してくれた。使用開始の正しいスタンプだ。ドキッとしたのは，その後である。リーズからダブリンへの汽船乗り場であるホリーヘッドまでの経路と時間を書いたメモを渡したとき，駅員はこう言ったのだ。

「この日は，この列車は動いていませんよ」「エエッ？」「日曜日は運休です」

日曜日は，リーズ・マンチェスター間で線路の工事があるため，列車が走らないのだそうだ。民営化によって運行と保線が別会社になり，事故が多発しているため，応急の工事が必要となったのだということを後で知った。

いつもならたった１時間で走る区間だが，この日は大変な遠回りになり，船の出発時間には間に合わないという。ビックリしてしまった。日にちを変えようか，リーズに行くのをやめようか，色々と考えた。そして，こう聞いた。

「バスでマンチェスターまで行けますか？」「バスで行けます」「その切符はここで買えますか？」「切符を買う必要はありません」「エエッ？」

「あなたはすでにこれを持っているじゃありませんか」と言って，ブリット・レイルパスを示す。この時，ようやく事情が飲み込めた。鉄道工事のための振り替え輸送でバスが出るということのようだ。早くそう言ってくれればいいのに……。

「出発時間は８時半で，早いですよ」。早くても何でも，とにかく行かなければならない。それに私にとって８時半は決して早い時間ではない。

というわけで，冷や汗をかかされた。しかし，何とかなりそうなので安心した。いや，まだ安心するのは早いかもしれない。当日の乗り換えや連絡など，これまで以上に神経を使うことになるだろう。まったくもって試練の旅である。

TUCの訪問

話が前後してしまった。今日は，イギリス労働組合会議（Trade Union Congress，TUC）のCongress　Houseを訪問することになっている[1]。

実は，TUCに行くのは，これが初めてではない。19年前の４月，都職労の訪欧調査団の随行員としてイギリスに来たとき，TUC本部を

訪れたことがある。

でも，その時のことはほとんど覚えていない。とにかく，TUCの本部に行ってみたいというだけで，自由行動の時間になったとき，アポイントメントも取らずに一人でタクシーに飛び乗り，入り口付近をうろついて帰ってきただけだから……。

何しろ，初めての海外旅行で，最初の訪問地がこのロンドンだったから，何も分からなかった。一人でタクシーに乗ることさえ，大変な冒険だった。

それに比べれば，今はもう慣れたものだ。電話をかけて大体の行き方を聞き，地下鉄に乗ってTUCの本部まででかけた。

TUC会館は大英博物館に行く途中にあるから，日本から来た人もたくさん通っている。でも，ここがイギリス労働組合の総本山であることは，ほとんど誰も気がつかないだろう。

写真：TUC会館

隣に並んでいるビルともそれほどの違いはない。前に立つ像と会館の入り口に書いてあるTRADE UNION CONGRESSという文字だけが，TUC会館であることを教えてくれる。

時間を見計らって中に入ると，受付がある。来意を告げると，そちらで待つようにと言われた。目を向けると，コーヒーラウンジのような場所があって，テーブルと椅子がある。しばらく待っていると，２階に行くように言われた。

そこに現れたのは車椅子の方だったのでビックリした。バンドラ・コタラワラBandula Kothalawalaさんといい，ＥＵ・国際関係局のメンバーだ。

TUCについては，すでに多くのことが知られている。したがって，このとき聞いた彼の話の中で私の印象に残ったことをかいつまんで報告することにしよう。先ず最近の状況だ。

この９月に，TUCはブライトンで年次大会を開いた。何と第133回大会だという。創立大会が1868年だから，日本の明治維新の年にあたる。それからの歴史を持っているわけだ。

この時の大会にはブレア首相も出席して挨拶する予定だったが，例のアメリカ同時テロ事件が発生し，前にも書いたとおり，ブレア首相はロンドンに戻ってしまった。この大会に出された年次報告を見れば過去一年間の動きが分かるということで，この報告書[(2)]をいただいた。

大会でも報告されただろうが，TUCの現勢は680万人で加盟は76組合だ。一番大きい産業別組合はUNISONで，教員や地方公務員などの公共部門の労働組合になる。次が運輸一般労働組合で，３番目が一般労働組合，４番目が電機機械合同労働組合だという。

「以前，NALGOという公務労働組合を訪問したことがあります」と言うと，NALGOは３

(1) イギリス労働組合会議のウェッブ・サイトについては，http://www.tuc.org.uk/を参照。

つの組合と合併してUNISONになったと説明された。他の公務関連労働組合と合併して最大の巨大組合になったというわけだ。

イギリスでも最近，組合の規模を大きくしようとして合併が進んでいるそうだ。「その理由は攻勢的なものですか，防御的なものですか」と聞くと，両方の意味があるという。

イギリスの労働組合は1979年には加盟人員1250万人で最高となったが，その後700万人弱にまで減少してしまった。組織人員の減少を合併で補うという意味では防御的だが，同時に，合併によって労働者に対する影響力，政府や企業に対する交渉力を高めるという点では攻勢的なものだというわけだ。

このような形で労働組合員が減少してきた理由としては，産業構造が転換し，それまで組合の力が強かった造船業，鉄鋼業，炭鉱などの産業が衰退したが，この変化に対応できなかったこと，サービス産業などが拡大し，パートタイマーなどの非正規労働者や女性労働力が増大したが．その組織化が十分でないこと，新たに拡大してきているIT関連の電子電機産業での組織化も遅れていること，特に若者の間で労働組合の人気がないこと，17年間に及ぶ保守党政権下で反労働組合的な政策や立法が行われ，ブレア労働党政権の下でも変わっていないこと，人々の態度が個人主義的になってきていることなどが挙げられた。

これらの理由の多くは，日本でも共通していることだ。イギリスの場合には，特に製造業や炭鉱などで強力な労働組合が存在していたから，産業構造の転換によって被った痛手はもっと大きかったかもしれないが……。

また，女性の組織化という点では，看護婦さんの例を出し，彼女らも組織を持っているが，労働組合ではなく専門職団体だということでTUCとは一線を画していると嘆いていた。

イギリスの労働組合組織率は30％位で，人員の減少と共に低下傾向にある。それを逆転させるための特別の努力をしているかと聞いたら，５年前から組織化学校organizing academyを設立し，青年を中心に100人くらいのオルグを養成したという。それまでは，組織拡大は産別組合にまかせており，TUCとして特別に取り組むことはなかったようだ。

「どこかに学校でも作ったのですか」と聞いたら，ここでやっている，期間は半年くらいだという。TUC会館でのオルグ養成特別講座の開催というところだろうか。

一般の組合員教育の場としては，ロンドンの北に全国教育センターという施設がある。AFL・CIOにおける労働カレッジとオルグ養成コースとの関係のようなものだろうか。

最後に労働党政府や労働党との関係について聞いた。その答は，概略，次のようなものだった。

保守党から労働党に政府が変わり，当然ながら関係は改善された。政府との間には定期的な協議の場があり，様々な問題を話しあっている。

ただ，一つの問題は，ブレア政府が前政権の導入した厳しいスト規制法などの反労働者的な法律を改正しようとしていないことだ。これは，組合の側からずっと要求している。

経済は好調で失業率も低く，IT不況の影響もそれほどではない。テロ事件の影響で株式市場が下落しているが，一時的なものでいずれ回復するだろう。

当然ながらTUCは労働党と密接な関係を持っており，その政策を支持しているが，し

---

(2)　“Congress 2001　General　Council　report.”

かし，公的には一定の距離を置いており，組織的・制度的なつながりはない。資金も提供していないし，選挙で組合員に労働党への投票を呼びかけたりすることもない。

選挙期間中も，TUCとしては選挙キャンペーンに加わらない。もちろん，傘下の組合の対応は様々で，TUCの役員も個人としてはキャンペーンに協力することはある。

彼の説明は，概ね以上のようなものだった。労働党との密接な関係はよく知られているが，それは非公式なもので，公的には労働組合と政党という相互の独立性を尊重するというもののようである。

大英博物館とナショナルギャラリー

TUC会館でのインタビューを終えて，すぐ近くの大英博物館に立ち寄った。この中に入って展示物を見た時，前回にも来たことを思いだした。いくつか見覚えがあったからだ。ロゼッタストーンも覚えていた。

大英博物館の壮大な展示物を見ているうちに，段々と不愉快になってきた。ここにある貴重な文化財や宝物，埋蔵物は，いわば大英帝国による略奪品ではないか。

エジプト，トルコ，イラン，イラク，インド，中国などの展示物がたくさんあるが，いずれもかつてイギリスの植民地だったり，大英帝国の一員だったりした地域や国である。そこから，イギリスが運び出してここに展示しているわけだ。

これらは本来，出土した国々の貴重な埋蔵文化財であるはずだ。歴史的な経緯は色々あるだろうが，それらの国に返還し，出土した国や地域で展示するべきではないだろうか。

イギリスで展示したければその時に借りてくればよい。現に，特別展示として日本の神道に関連する展覧会が行われていたが，ここに展示されている国宝や重要文化財は，日本から一時的に借りてきたものだ。

ところで，この時，珍しいものを目にした。それは，縄文時代の火炎式土器だ。この土器は我が故郷・新潟県で発見されたもので，十日町市博物館所蔵のものであることが明記されていた。もし，日本がイギリスの植民地だったことがあるとすれば，この火炎式土器も大英博物館の所蔵品になっていたかもしれない。

それぞれの埋蔵文化財は，それが埋まっていたところ，掘り出されたところに戻すべきだろう。「落とし物」を拾ったのはイギリスかもしれない。またその価値を見出し，歴史的・文化的意義を明らかにしたのも，それを大切に保存してきたのもイギリスの功績かもしれない。

しかし，「落とし物」は，本来，持ち主に返すべきものだ。それが価値あるものであればあるほど，なおさら返すべきだろう。

現在，エジプトなどいくつかの国から返還要求を出す動きがあると聞いたが，それは当然である。少なくとも現在の博物館は，「大英博物館」ではなく「大英帝国博物館」と名前を改めるべきだろう。

ここにはまさに「帝国の遺産」が陳列されているのであり，それは悪しき帝国主義による略奪品の数々を自慢しているようなものだ。私が不愉快になった理由はここにある。

少なくとも「British　Museum」というからには，イギリスの文化財をもっと発掘し，展示して紹介することに努めるべきではないだろうか。エジプトや中東地域の文化財の豊富さに目を見張れば見張るほど，イギリス自身の展示品の少なさ，貧弱さに意外な思いを抱く。

この後，またまた行ってしまった。トラファルガー広場に面している美術館「ナショナル・ギャラリー」である。

ここには，18～19世紀のヨーロッパ名画だけ

でなく，ダ・ビンチやラファエロなど，ルネサンス期の巨匠の名画もある。それに，オランダの国立博物館で見るはずだったフェルメールの名画が一点，ナショナル・ギャラリーに貸し出し中で，見ることができなかった。これは是非，ここで見なければならない。

ということで，中に入ろうとして入口のデスクの所に行き，「いくらですか？」と聞いたら，「フリー」だと言う。「エッ？　ただですか。こいつはラッキーだ」と言ったら，係の人が笑っていた。

入場料がないということは，何度来てもお金がかからないということだ。ロンドンにはまた来るので，印象派を中心とした新しい時代のものだけを見て，引き上げてきた。

マンチェスターの労働史資料研究センター

ロンドンからバスに乗ってマンチェスターにやってきた。ビートルズが「マンチェスター・アンド・リバプール」と歌った，あのマンチェスターだ。

世界の綿工業の中心として産業革命を領導した地であり，イギリス労働運動の揺籃の地でもある。第２次世界大戦後，工業の中心地としての地位は近くのリバプールに譲ったが，機械，化学，出版などの産業は今も盛んだ。

世界で初めての鉄道はこのマンチェスターとリバプールを結ぶ線で走った。鉄道発祥の地でもある。

ただ，古くから発達したためか，工事中の場所が多く，老朽化した廃墟のような建物も目に付く。景観の保存と都市の再開発が，これからの課題であるように思われる。

例によって，バス旅行の途中から雨が降り出し，マンチェスターも雨の中だった。タクシーに乗って何とかホテルに辿り着き，IALHIのタンペレ大会で知り合いになったスティーブン・バードさんに電話した。

「今，マンチェスターに着きました。これからタクシーで行きます」と言うと，近くだからタクシーに乗る必要はないという。大体の場所を聞いて，ホテルからもらった地図を見ると，確かにそれほど遠くなさそうだ。

駐車場の脇で地図を見ていたら，管理人が大きな声で呼んでいる。近づいていったら，「何を捜しているんだ」と聞いてきた。教わった方向に歩いていくと，大変立派な建物がある。地図にはTown　Hallとあるから市庁舎だ。

この近くだということだから，市の中心になる。中華街のような所を通り過ぎたところに，労働史資料研究センターThe Labour History Archive and Study Centerがあった[3]。

後で，バードさんにうかがったところでは，この建物で1868年にTUCの創立大会が開かれたのだそうだ。ここに資料館が置かれている理由が，これで分かった。

労働史資料研究センターはこの建物の一部で，他の部分は今も会議室や集会室として使われている。この日も会議があったようで何人かの参加者が外に出てきた。

その参加者の一人が，うろうろしていた私を見て会議室の方の入り口を教えてくれた。実は，この親切が仇になってしまった。中に入ると，事務室の入り口には鍵がかかっていて，インターホンでしか話ができない。

「バードさんにお会いしたいんですが」と言

---

(3)　労働史資料研究センターはマンチェスターにあるジョン・ライランズ大学図書館によって運営されており，センターのウェッブ・サイトhttp://www.nmlhweb.org/archive.htmも図書館の一部に組み込まれている。

写真：労働史資料研究センター

うと，「ここにはいません。別の場所です」という返事だ。その場所を聞いたが，インターホン越しでは良く分からない。ネイティブの英語は流ちょうすぎる。仕方がないので，インターホンに向かってこう言った。

「私は日本人です。英語が良く分かりません。出てきて地図で説明してくれませんか」

ヤレヤレ，というような顔をして小母さんが出てきた。紙を持ってきて，四角を書いて説明してくれた。

「これがこのビルです。」「はい。分かります」「ここが出口です」「はい。それも分かります」

「ここから出ていって，この角を曲がって，こちらから入ってください」「エッ。それだけですか。遠くじゃないんですか」「このビルの反対側の入り口です。」

バードさんは同じビルの中にいた。でも，中で二つに分けられていて，こちらからは直接行けない構造になっていたわけだ。

それが分からない。情けないもんだ。地図も何も，書いてもらったのはただの四角形だ。それを持って，とぼとぼと反対側の入り口に向かった。

予定の時間よりかなり遅れてしまったが，何とかスティーブン・バード Stephen Birdさんに会うことができた。早速，中を案内していただいた。

先ず，事務室のような所があり，閲覧室がある。その奥の部屋には，資料が箱に入って積み上げられている。

「これは何ですか？」「これはイギリス共産党の資料です。」「共産党の資料？」

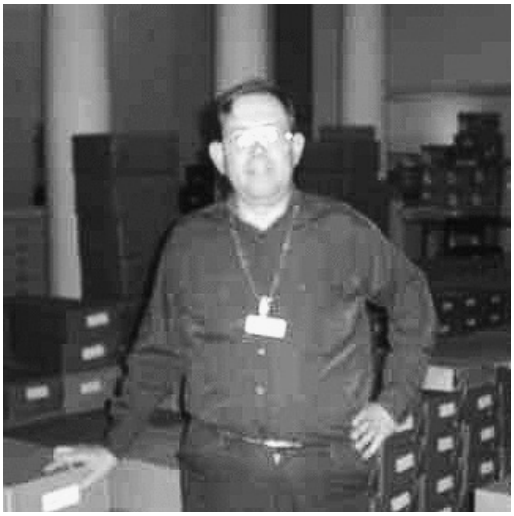
労働党だけでなく，共産党の資料もここにあるというのだ。それも，1943年から1991年までの全ての資料があるという。

イギリス共産党は1920年に創立されるが，それから1943年までの資料は，ほとんどをモスクワに送っており，イギリスにはないそうだ。それ以降の資料がここにあるというわけだ。

ここはイギリス共産党の資料の宝庫だ。閲覧室でマンチェスター大学の先生が資料を見ていたが，イギリス共産党史の研究家だという。早速，宝の山に踏み入っているわけだ。

まるで，宝の山に入り込んだ盗賊のようなものだ。好みのお宝が自由に手にはいるわけだから……。

でも，問題は，この宝の山から出ることができるかどうかだろう。あまりにもたくさんの宝



写真：案内してくださったバードさん

物があると，それに埋もれてしまう恐れがあるからだ。多くの資料の中から一番大切なものを探し出し，それをまとめて一つの成果として発表しなければならない。資料が少なすぎても困るが，多すぎても，それをどう手際よくまとめるかが問われることになる。

このほか，当然ながらここにはTUCや労働党関係の基本資料がたくさん残っている。TUCの創立大会がここで開かれたわけだから，その記録や，それ以来の会議録なども残っている。

写真：イギリス共産党資料の山

TUCが発行している通信類の送付先の古い名簿があるというので見せていただいた。日本という項目が目に付いたのでそこを見たら，セン・カタヤマ，キングスレー・ホール，カンダと書いてあった。

また，TUC設立以前の初期における労働運動についての資料はもちろん，1830年代のチャーチスト運動の資料もある。ただし，それほど多くなく，ダンボールに２箱だった。

ウィリアム・モリスやクロポトキンの手紙もある。1893年６月22日の日付と本人の署名のあるエレーナ・マルクスの手紙も見せていただいた。

人民の歴史博物館

「ところで，展示はどこですか？　博物館もあるんでしょ？」「展示？　展示はここじゃないよ。」「ここじゃない？」

私は大きな思い違いをしていた。博物館の一

写真：資料保存庫の中

部として資料保存部門があると思いこんでいたのだ。したがって，博物館と資料研究センターが別々の建物だとは思っていなかった。

「歩けば20分ほどかかるんだ。もうこんな時間か。時間がないな」「どうしてですか」「４時半に閉まっちゃうんだ。時間がないから車で送ってあげよう」

ということで，バードさんの車に乗せていただいて向かったのが，人民の歴史博物館The PumpHouse：Peoples History Museumである[(4)]。こちらも立派な建物だ。

バードさんに紹介された副館長のキャサリン・ルーCatharine　Rewさんの案内で，博物館の中を見て回った。閉館間近ということで，駆け足での見学だった。

この博物館は，元々はロンドンにあったという。その後マンチェスターに移り，資料センターの一部としてあの建物の中で展示されてい

写真：人民の歴史博物館

たのが，ここに移転したのだそうだ。この博物館にPumpHouseとあるのは，ここは昔，水をくみ上げてマンチェスターに供給するポンプ小屋だったからである。

当然，この移転によって規模も内容も拡大し，展示も充実してきた。私は，アムステルダムとコペンハーゲンで同種の博物館を見たが，ここの展示が一番充実しているという印象を受けた。

中には，トマス・ペインの使った机やデス・マスクがあった。ペインはイギリスで生まれたが，後にアメリカに渡り『コモン・センス』を書いてアメリカ独立革命に多大な影響を与えた人物だ。

その人の机やデスマスク，それに髪の毛の一部などが何故ここにあるのか，その理由は分からない。しかし，ラディカル・デモクラシーの源流ということでいえば，まさにペインはここにふさわしい人物ではあるだろう。

ここにも，立派な装飾が施された組合旗がたくさん展示されていた。大きさも，装飾もこれまで見た中で一段と立派なものだ。旗の中には，1832年のものがあった。日本で言えばまだ江戸時代で，大塩平八郎の乱のさらにその前にあたる。

そもそも，チャーチスト運動で普通選挙権を含む人民憲章を要求して人々が立ち上がった1830年代そのものが日本の江戸時代に当たるわけだ。イギリスにおける人民運動，民主主義運動の立ち上がりの早さ，歴史の長さに改めて驚嘆した。

この1832年の旗もチャーチスト運動と関連のあるもので，この年に実現した選挙法の改革を祝うものだという。男女が並んで立っており，それぞれ男性用，女性用の靴を持っている。靴製造の職人の団体が作ったもののようだ。

この1832年の改正は，その後何度も繰り返される選挙法改正の最初だった。それまで選挙権を持つ人は，人口の３％にすぎなかったというから，改正要求が高まるのも当然だろう。この改正によって都市や農村の中産階級の多くが選挙権を獲得し，その後の有権者拡大に向けての出発点となった。

帰るとき，入り口横の売店で組合旗の絵葉書を売っていた。何枚か買ったが，その中には1821年の旗というものまである。TIN PLATE WORKERS SOCIETYと書いてあるから，ブリキ板労働者協会とでもいうのだろうか。ブリキ板を製造していた職人達で作ったクラフト・ユニオンの一種だろう。

ところで，このような凝った組合旗を作るという「風習」は，日本の労働組合には伝わらなかったのだろうか。絵画のような刺繍を施したこんなに立派な組合旗を見たことはないのだが……。　（以下，続く）

（いがらし・じん　法政大学大原社会問題研究所教授）

---

(4)　ここでは“The PumpHouse：Peoples History Museum a guide.”という立派なパンフレットをいただいた。